
基地の外

某槻ケンヂ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

基地の外

【Nコード】

N9766D

【作者名】

某槻ケンヂ

【あらすじ】

虐めで精神を追いつめられ発狂寸前の引きこもり「S」は、奇妙な武術である「バリツ」を使う気狂い探偵「H」と出会う。「H」に勝手に助手とされ、「S」は、創造技術価値向上大学の「M」教授の主催する怪しい集会に参加する。その集会で「S」は様々な趣味を持った変態たちと血泥みの殺し合いをする事になる。気狂い妄想犯罪青春活劇。

事の起り。（前書き）

警告 場合によっては差別とも捉える事ができる表現やエログロ描写などがありますが、あくまでそれを目的として書かれているわけではありませんのでご了承ください。

事の起り。

万有の真相は唯一言にしてつくす、

曰く「不可解」我この恨を懷いて煩悶終に死を決す。

「藤村操の辞世の句より」

小学校時代のSは、俗に言う「いじめっ子」だった。

校庭の隅にある鄙びた花壇の上に這い蹲る一匹の蟻。

それを掴み上げ、同級生の松村の顔に近づけ言い放った。

「食べる」

周りの人間は酷いなどと言っているが、決して止めたりはしない。

むしろ、それを松村が口に含む瞬間を今か今かと待ちわびていた。

傍観者はいつも最低だ。

「どうした、それとも痛いヤツの方が好きなのかい？」

反射的に、松村は自分の右腕をさすった。

前に、神社で松村を蹴倒し、自転車で右腕を轢いた事があったのだ。

他にも様々な肉体的な虐めを松村に与えていた。

彼には選択の余地などなかったのだろう。

松村は口に蟻を放り込んだ。

傍観者達は、手を叩き喜び笑っていた。

顔を歪ませ目を背ける者もいたが、松村を哀れに思っているわけもなく、ただ「蟻を食べる」という気持ち悪い光景から目を背けただけであった。

「本当にこいつ馬鹿だよな」

Sは絶好調だった。自分の予定していた余興が大盛り上がりし誇らしくさえ思っていた。

しかし、そこから世界は変わる。

唐突に太陽が沈み、暗黒の夜が一瞬にして這い上がる。

口には甘い味覚が広がる。

しかし、決して心地よい物ではない。

嘲る聴衆。

虐げられる民と暴君。

その関係が反転していたら、あなたはと思う？

昨日まで友人が親友が自分に矛を突きつけるような奇妙な感覚。

それは中学に起こった。

松村が革命を起こしたとでも言えはいだろうか。

Sと松村の関係は、綺麗に逆転したのだった。

Sの度重なる虐めを松村はただ我慢しているだけではなかった。

小学校であるから大しては貰えないお小遣い。

誕生日やクリスマス、正月のお年玉。

そういった物を細々と貯蓄したのだった。

松村は、容姿もさほど良くなく運動も駄目だったが

頭は冴えていたのだ。

中学に上がった所で勝負に出た。

松村の事を知らない他の小学校から上がってきた者たちに

貯蓄である「金」を盛大にバラまいたのであった。

これにより、腕っ節の強い不良達を従える事に成功した松村に

Sは手が出せなくなったのだ。

松村の勝負はここでは終わらない。

わざと仲間の中でも一際キレている藁谷の財布を盗み、Sの机に忍ばせたのである。

そして、Sの犯行だと松村は藁谷に教えた。

その日の放課後、Sは藁谷の放ったバットで頭を殴られ5針縫うほどの大怪我を負い入院した。

Sが入院している間に、Sの友人たちが徹底して虐めにあつた。

友人達はSのせいだと彼を恨み、とうとう、彼には友達もいなくなつたのであつた。

「また、あの日の夢か……」

壁掛け時計を見みると夜のまだ二時だつた。

Sは学校に行つていれば16歳の高校一年生になっていた。

松村を恐れてか、Sは学校に行かなくなり、今は引きこもりだ。

最近、何故かSはよく松村を虐めていた小学校の頃の夢をよく見るのであつた。

「松村の野郎……あの時ぶつ殺してればこんな事には成らなかつたんだ……」

意味もない破壊衝動にかられ枕を壁に投げつける。この衝動に駆られ、Sの部屋は散々に荒れまくっていた。

それがまるで、自分の心の中のように見えて嫌で仕方がなかったの
で外に飛び出した。

ポッケの中に折りたたみナイフを忍ばせ、夜の散歩を行う事も日課だった。

その凶器が自分の狂気の引き金になるなどと思いもしていなかった。

Sは十分ほど歩いて自分が通っていた小学校まで来た。

塀をよじ登り、敷地内に侵入する。

そして、松村に蟻を喰わせたあの花壇まで足を運ぶのだった。その時、Sの精神はすでに異変をきたしていたのだと思う。

彼はジーパンのチャックを外し、自分の性器をあらわにした。

そこで彼は自慰行為にふけたのであった。

松村を虐めていたという彼にとつての最高の記憶。

それを肴にし彼は行為にふけていた。

かなり歪んだ現実逃避のあり方だったのだろう。

5分もすると彼は絶頂に達し、花壇に白濁液を放った。

「若いつていいですね」

そんな声が不意に後ろから聞こえた。

心臓は今にはち切れんばかり鼓動していた。

「だ、誰だ!？」

後ろに立っていたのは奇妙な格好の人物であった。

身長は180センチぐらいで、インバネス・コートに鹿撃ち帽を被っていた。

鷲鼻で角張った顎が特徴的な顔の男であった。

しかし、Sにとってそんな事は重要でなかった。
今自分が行っていた恥ずかしい行為。
それを他人に見られてしまったのだ。

彼は反射的にポケットから、ナイフを取り出し男に突進した。

一瞬の出来事。

Sはナイフで男に突進した際に目を瞑った。

次に目を開けたときに、Sの目に見えたのは花壇の黒土だった。

そして、土の味が口いっぱいに広がっていた。

これが、Sを狂気の沙汰へと招待する気狂い探偵「H」との初めての
の出会いだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9766d/>

基地の外

2010年10月16日00時11分発行